

大学院生の発表論文・受賞

受賞者氏名：久保雄一郎（人間発達専攻 博士課程前期課程）

受賞名：スポーツ庁長官賞

受賞年月日：2017年7月15日

受賞理由：「VR映像（仮想現実）」と「EMS」による筋肉への電気刺激を活用した新しいトレーニング法を提案し、その着想が評価された。

受賞者氏名：石原興子（人間発達専攻 博士課程後期課程）

受賞名：日本音楽即興学会奨励賞受賞

受賞日：2017年3月24日

受賞理由：日本音楽即興学会第8回（2016年度）大会における研究発表「精神科即興音楽療法における打楽器の臨床的役割—文献研究からの一考察—」が本学会の音楽即興の発展に貢献することが顕著に期待されるため。

受賞者氏名：坂田雅之（人間環境学専攻 博士課程前期課程）・真木伸隆・杉山秀樹・源利文

受賞名：優秀口頭発表賞（日本陸水学会第82回大会，2017.9.28-10.1）

受賞年月日：2017年9月30日

受賞理由：「雄物川本流における絶滅危惧種ゼニタナゴの再発見と繁殖地特定」と題した研究と発表が優秀であると評価された。

受賞者氏名：藤村日向子（人間環境学専攻 博士課程前期課程）

受賞名：2017年日本建築学会優秀卒業論文賞

受賞年月日：2017年8月31日

受賞理由：「子どもの貧困」問題に対し、居住する住宅種別を軸とした家族と就労、生活の時系列的変化の視点から分析を行った、社会的意義の高い研究である。また、貧困という建築学の枠外概念を対象とするため、語の定義や貧困をめぐる社会的動向を丹念に検討したうえで、住宅・土地統計調査マイクロデータを独自集計した分析や詳細なインタビュー調査を行い、「子どもの貧困」を住宅所有形態の類型から説明したことは大変興味深い。居住実態の表現として建築学的図面などの分析が不十分ではあったが、対象となる世帯を絞り込んでいく過程、居住変遷の過程を描き出す分析も理路整然としており、完成度の高い卒業論文として評価できる。

受賞者氏名：足立安里紗（人間環境学専攻 博士課程前期課程）

受賞名：平成 27 年度日本建築学会大会（関東）学術講演会 建築社会システム委員会 若手優秀発表賞

受賞年月日：2015 年 11 月 13 日

受賞理由：戦後の持家政策をはじめとする制度・政策や、住宅設計のモデルまでが、画一的な標準ライフコースを想定し、策定されてきた。しかし、近年の若者が辿るライフコースは必ずしも一様ではなく、分岐し始めている。本研究は国勢調査および住宅・土地統計調査の匿名データの分析、対面インタビュー調査を通して、若年層のライフコースがそれまで想定されていた 1 つのパターンではなく、4 つの型に分類できることを示した。さらに 1995 年から 2010 年までの 15 年間でそれぞれの型の割合に変化が生じていること、若者がライフステージごとにこの型を移動する際に都市部・農村部で地域差が見られることも明らかにした。また分析で得られた結果から、戦後の政府が推進してきた特定ライフコースのみを対象とする住宅制度・政策ではすでに不十分であること、希望するライフコースを選択できる若者と選択できない若者の差異の一因に住宅事情があることも指摘した。以上の研究発表において、その研究テーマの独創性、学術的意義・研究方法的的確性・研究結果の内容・プレゼンテーション、質疑応答的的確性という 4 つの観点から総合的に判断し、特に傑出しており顕彰に十分に値する発表であると評価されたため、同賞が与えられた。

受賞者氏名：黒田剛広（人間環境学専攻 博士課程前期課程）、高見泰興

受賞名：ポスター賞最優秀賞（行動分野）（第 64 回日本生態学会大会，2017. 3. 14-18）

受賞年月日：2017 年 3 月 15 日

受賞理由：「チョウセンカマキリに対するハリガネムシの寄生コストと形態改変」に関する研究と発表が非常に優秀であると評価されたため。

受賞者氏名：高橋颯吾（人間環境学専攻 博士課程前期課程）、高見泰興

受賞名：ポスター賞優秀賞（行動分野）（第 62 回日本生態学会大会，2015. 3. 18-22）

受賞年月日：2015 年 3 月 19 日

受賞理由：「交尾器形態の多様化をもたらす性淘汰の検出」に関する研究と発表が優秀であると評価されたため。

著者：神野雄（人間発達専攻 博士課程後期課程）

論文題目：架空の浮気場面への予測行動尺度の信頼性・妥当性の検討

雑誌名・巻号・ページ・年月：パーソナリティ研究，26(2)，pp.140-153，2017. 11

論文の概要：本研究の目的は恋愛関係での葛藤時に予測される行動を測定する架空の浮気場面への予測行動尺度 Anticipated Behavior Scale for Imaginary Infidelity (ABSII) の作成とその信頼性・妥当性の検討であった。ABSII の浮気場面として恋人と第三者のデート場面を設定し、質問紙調査の結果、ABSII は想定通り「攻撃志向」「沈黙志向」「別れ志向」

「対話志向」「ライバル志向」の5因子構造を示し、内的整合性の観点からの信頼性が確認された。また他の尺度との関連の検討から ABSII の構成概念的妥当性がおおむね確認された。

著者： 鶴木千加子（人間発達専攻 博士課程後期課程）

論文題目： 第二次世界大戦下とその直後における国際バドミントン連盟の活動

雑誌・巻・号・ページ・年月： 体育・スポーツ科学, 26, pp. 9-21, 2017. 6

論文の概要： 本研究では、戦争により停滞した国際バドミントン連盟（IBF）の活動が、どのように再開したのかを明らかにすることを目的とした。IBF 役員によって交わされた書簡及び IBF 議事録を用い、活動実態を分析した。その結果、トマス卿らによって、年次総会審議事項の取扱い、第一回トマスカップ大会開催準備、加盟団体への戦争の影響への対応がなされたことにより、活動がスムーズに再開されたことが明らかになった。それにより、1955 年まで続くトマス卿らによる長期運営体制の基盤が確立された。

著者： 松本和也（人間発達専攻 博士課程前期課程）、山口泰雄

論文題目： 大学生のスポーツ・ボランティア活動を通じたボランティアイメージの変容に関する研究

雑誌名・巻号・ページ・年月： 体育・スポーツ科学・26, pp. 23-29, 2017. 6

論文の概要： 本研究の目的は大学生がスポーツ・ボランティア活動を通してどのようなボランティアに対するイメージが変化するのか、また、どのような要因の影響を受けてイメージが形成されるのかを明らかにすることにある。第 5 回神戸マラソンにボランティアとして参加した大学生 286 名に対し、参加前、参加後にそれぞれ質問紙調査を実施した。結果としては、活動前後の比較から 18 項目中 14 項目でボランティアイメージにポジティブな変化が見られた。また、活動満足が高いほどボランティアイメージはポジティブになること、男性に比べ女性の方がポジティブに変化することが明らかとなった。

著者： 久保雄一郎（人間発達専攻 博士課程前期課程）、山口泰雄

論文題目： VR を用いたスポーツ・ヘルスケア市場の活性化～EMS との融合～

雑誌名・巻号・ページ・年月： スポーツ産業学研究, 27(4), pp. 351-354, 2017. 12

論文の概要： VR と EMS を用いることで、スポーツ産業及びヘルスケア市場の活性化に貢献するために、VR と EMS を用いたトレーニングソフトを提案した。具体的には、アスリート向けトレーニングソフト、ヘルスケア向けトレーニングソフト、フレイル向けトレーニングソフトの提案を行った。

著者： 青山将己（人間発達専攻 博士課程前期課程）、山口泰雄

論文題目： 障害者スポーツ指導者の活動満足に影響を及ぼす要因に関する研究

雑誌名・巻号・ページ・年月：生涯スポーツ学研究, 14(1), pp.31-41, 2017.10

論文の概要：本研究の目的は、障害者スポーツ指導者の活動満足に影響を及ぼす要因を明らかにすることにある。障がい者スポーツ指導員資格保有者6名と無資格指導者6名に対し、半構造化インタビューと質問紙調査を実施した。結果、高満足群においては「個人的属性」、「達成感」、「ソーシャル・サポート」の影響を強く受けていた。低満足群においては、「ソーシャル・サポート」のみが正の影響を及ぼしていた。また、「技術志向性」、「達成感」において負の影響要因がみられた。

著者：西野倫世（人間発達専攻 博士課程後期課程）

論文題目：現代米国の教員評価制度にみる学力テスト結果に基づく「貢献度」析出方法の妥当性と課題—テネシー州 Value-Added モデルの算出式の検証から—

雑誌名・巻号・ページ・年月：教育制度学研究, 24, pp.61-79, 2017.11

論文の概要：先進工業諸国では教育改革の進展に伴い「教師の貢献度」を析出することが喫緊の課題となっている。米国では他国に先駆けてその制度化の社会実験が行われ、児童生徒の学力テスト結果に影響を及ぼすもののうち、家庭背景や地域文化など教師が統制できない要素の分離を志向する動きがみられる。本論文は、こうした「教師の貢献度」析出に関して算出式を含む詳細な動向を分析・考察した研究としては関連学会初のものである。分析の結果、評価の厳密化に伴いむしろ教師が疎外されるという困難が生じることや、評価手法としての洗練度にかかわらず世論への弁明として制度が普及するという矛盾を解明した。

著者：若林陽平（人間環境学専攻 博士課程前期課程）、蔡佩宜、田畑智博、佐伯孝

論文題目：Life cycle assessment and life cycle costs for pre-disaster waste management systems（事前段階での災害廃棄物処理システムの構築に対するライフサイクルアセスメント、ライフサイクルコストの利用）

雑誌・巻号・ページ・年月：Waste Management, 68, pp.688-700, 2017.10

論文の概要：地震、津波などの自然災害が発生に伴い、災害廃棄物が発生する。被災地の早急な復旧・復興には、災害廃棄物の撤去、処理が欠かせない。災害廃棄物は撤去された後、仮置き場に搬入され、保管・選別される。その後、焼却、リサイクル、埋め立てなどの処理がなされる。国・自治体は、南海トラフ巨大地震や首都直下型地震などの今後発生する可能性のある大規模自然災害を対象として、災害廃棄物処理に関する政策をまとめている。しかしながら、災害廃棄物の処理に伴い発生する環境負荷やコストの評価方法や評価に用いる原単位が整備されていないことから、処理政策の実効性を試算することができていなかった。本研究では、ライフサイクルアセスメント、ライフサイクルコストの手法を災害廃棄物処理に適用するための方法論を提案するとともに、評価に必要な原単位を作成した。続いて、本方法論を用いて三重県を対象としたケーススタディを実施した。まず、

南海トラフ巨大地震の発生を想定して災害廃棄物発生量とその空間分布を地理情報システムなどを用いて推計した結果、全域で 7,178~11,956 百万 t の住宅由来の災害廃棄物(津波堆積物を含む)が発生する可能性があることを示した。次に、都市公園などを仮置場の候補地とした場合の、仮置場の必要面積と実際の設置可能面積を比較した結果、特に伊勢志摩地域で仮置場が逼迫する可能性があることを示した。これを踏まえ、運搬、仮置き、処理の各工程での環境負荷(二酸化炭素(CO₂), 硫黄酸化物(SO_x)など)の排出量、コストを算出した。結果の一例として、CO₂ 排出量は三重県の年間排出量の約 1~2%であり微々たるものであったが、SO_x 排出量は三重県の年間排出量の 26%を占めていた。SO_x は大気汚染の原因物質であることから、災害廃棄物処理においては大気汚染物質の排出を最小限に抑えることの必要性を示した。

著者：坂田雅之(人間環境学専攻 博士課程前期課程), 真木伸隆, 杉山秀樹, 源利文

論文題目：Identifying a breeding habitat of a critically endangered fish, *Acheilognathus typus*, in a natural river in Japan

雑誌名・巻号・ページ・年月：The Science of Nature – Naturwissenschaften, 104, 100, 2017.12

論文の概要：近年発展する環境 DNA 分析手法と採捕調査を組み合わせることにより、秋田県の雄物川本流で絶滅危惧種 IA 類のゼニタナゴの繁殖地を発見した論文である。秋田県の雄物川の本流 99 箇所環境 DNA 分析を行った結果、2 箇所でゼニタナゴの DNA が検出され、うち一箇所成魚および二枚貝に産み付けられた卵を確認した。雄物川はゼニタナゴの本来の生息地である自然の大河山としては最後の生息地と見られており、今回のゼニタナゴ成魚発見は 11 年振りである。本論文によって、環境 DNA 分析と採捕調査の組み合わせが希少種の生息地発見に有効な手法であることを示した。

著者：勝原光希(人間環境学専攻 博士課程後期課程), 北村俊平, 丑丸敦史

論文題目：Functional significance of petals as landing sites in fungus-gnat-pollinated flowers of *Mitella pauciflora* (Saxifragaceae).

雑誌名・巻号・ページ・年月：Functional Ecology 31, pp.1193–1200, 2017.6

論文の概要：被子植物の花弁の機能についてはこれまで主に送粉者の誘因機能について研究が進んできました。この研究では、キノコバエ媒花を咲かすコチャルメルソウの花弁について、有意な誘因機能はみられず、送粉者の花への取り付きを促進することが主な機能であることを明らかにしました。